

目 次

付録 A	有限要素法の実行	1
A.1	例題の設定	1
A.2	メッシュデータの作成	2
A.3	弱形式とその行列・ベクトル表現	6
A.4	メイン関数	9
A.5	係数行列の構成	11
A.6	右辺ベクトルの構成と Robin 境界条件の取り込み	14
A.7	Dirichlet 境界条件の取り込みと連立一次方程式の解法	16
A.8	解の可視化	17
参考文献		19

付録 A

有限要素法の実行

付録 A では，MATLAB を用いた有限要素法の実際の計算方法を説明する．第 XX 章と第 XX 章 XX 節を既習であることを前提としている．あくまで概要を説明するのみであるから，より詳しいことは，[1]，[2]，[3]，[4]などを参照されたい．以下で紹介するプログラムは，著者が作成したものであるが，メッシュデータの構造に関しては，[5]を参考にした．

A.1 例題の設定

$L > 0$ を定数とする．正方形領域 $\Omega = (0, L) \times (0, L)$ の 4 つの辺を $\Gamma_N = \{(x, y) \mid 0 < x < L, y = 0\}$ ， $\Gamma_D = \partial\Omega \setminus \overline{\Gamma_N}$ のように分割する（図 A.1 を見よ）．

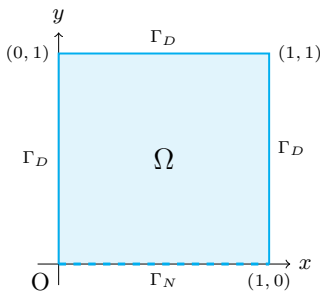


図 A.1 $L = 1$ のときの正方形領域 Ω とその境界 Γ_D ， Γ_N ．

2 付録 A 有限要素法の実行

そして、 Ω 上で、次の楕円型方程式を満たす関数 $u = u(x, y)$ の近似解を有限要素法で求めよう。

$$-c\Delta u + qu = f \quad (x, y) \in \Omega, \quad (\text{A.1a})$$

$$-c \frac{\partial u}{\partial n} = \kappa(u - g) - r \quad (x, y) \in \Gamma_N, \quad (\text{A.1b})$$

$$u = g \quad (x, y) \in \Gamma_D. \quad (\text{A.1c})$$

ただし、 $c > 0, q \geq 0, \kappa \geq 0$ は与えられた定数、 $f = f(x, y)$ 、 $g = g(x, y)$ 、 $r = r(x, y)$ は与えられた関数である。 g と r は、それぞれ、 Γ_D と Γ_N の上だけで定義されていればよいが、ここでは、簡単のため、 $\bar{\Omega} = [0, L] \times [0, L]$ 上で定義された連続関数とする。同様に、 f も $\bar{\Omega}$ 上の連続関数としよう。

例 A.1. $c = q = \kappa = 1$ として、(A.1) の解が、

$$u(x, y) = e^{-5(x-1/2)^2 - 5(y-1/2)^2}$$

となるように、 f 、 g と r を求めておき、具体的な計算を行う際のデータとする。

A.2 メッシュデータの作成

有限要素法を適用するために、三角形分割を導入する。まず、一般的な方針を述べる。領域を三角形に分割した後に、すべての節点に通し番号 $1, 2, \dots, np$ を振り、 P_s ($s = 1, 2, \dots, np$) と名前を付ける。 np は全節点数である。各節点の座標を $P_s = (x_s, y_s)$ とする。同様に、すべての要素に通し番号 $1, 2, \dots, nt$ を振り、 T_l ($l = 1, 2, \dots, nt$) と名前を付ける。 nt は全要素数である。このようにしてできた三角形分割を $\mathcal{T}_h = \{T_l\}_{l=1}^{nt}$ と表す。

いま、図 A.2 の左図のように、 T_l を一つ固定し、その3節点を Q_1^l, Q_2^l, Q_3^l とする。これらを、 T_l の局所的な節点と言う。ただし、 $Q_1^l \rightarrow Q_2^l \rightarrow Q_3^l$ の向きが、反時計回りになるようにしておく。これに対して、 P_s は大域的な節点と言われる。局所的な節点には、大域的な節点に対応しているはずである。それらを、 $Q_1^l = P_s$ 、 $Q_2^l = P_t$ 、 $Q_3^l = P_v$ とする。局所的な節点と対応する大域的な節点の通し番号の対応を、 $\#Q_1^l = s$ のように書く。

A.2 メッシュデータの作成 3

次に、 Γ_N を構成する辺の数を ne とし、すべての辺に $1, 2, \dots, ne$ と通し番号を振り、 e_k ($k = 1, 2, \dots, ne$) と名前を付ける．すなわち、 $\overline{\Gamma_N} = e_1 \cup e_2 \cup \dots \cup e_{ne}$ である．図 A.2 の右図のように、各 e_k の両端の 2 節点を E_1^k, E_2^k とする．ここで、 e_k を辺に持つ要素 T_l を考えた際に、 $E_1^k \rightarrow E_2^k$ の向きが、反時計回りになるようにしておく． E_1^k, E_2^k が、それぞれ、大域的な節点に $E_1^k = P_s$ と $E_2^k = P_t$ のように対応しているとする．大域的な節点の通し番号を $\#E_1^k = s$ と参照する． Γ_D についても同様に、これを構成する要素の辺の数を nd として、すべての辺を d_k ($k = 1, 2, \dots, nd$) とする．各 d_k の両端の 2 節点を $D_1^k = P_s, D_2^k = P_t$ として、 $\#D_1^k = s$ と参照する．

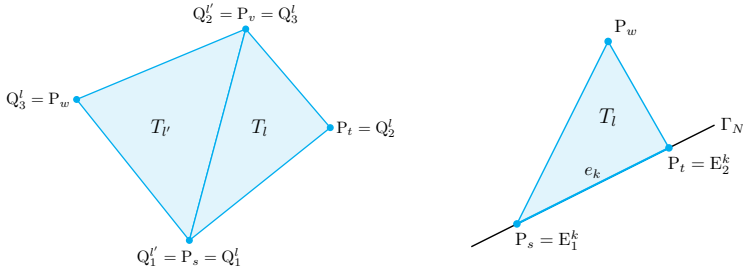


図 A.2 三角形分割における節点と要素

以上を確認した上で、問題の正方形領域 Ω の三角形分割を行おう．図 A.3 のように、 Ω の各辺を m 等分し、 $h = 1/m$ とおき、合同な $(m+1)^2$ 個の直角三角形に分割する (図 A.3 では $m = 5$ としている)．節点数は $np = (m+1)^2$ ，要素数は $ne = 2m^2$ となる．各節点の座標は、

$$P_i = (sh, th), \quad i = (t-1)m + s, \quad (s, t = 1, \dots, m+1) \quad (\text{A.2})$$

である．要素の番号付けも図 A.3 のように行い、これで、 T_l ($l = 1, \dots, nt$) を作る． Γ_N を構成する辺は、 $e_s = \overline{P_s P_{s+1}}$ ($s = 1, 2, \dots, 5$) であり、残りの境界上に位置する辺はすべて、 Γ_D を構成する辺となる．特に、 $ne = 5$ ， $nd = 15$ である．

これらの三角形分割に関する情報を元に、表 A.2 に示すような形式のファイル (mesh.dat) を作る．そこに現れる idn_l などは、データの整理の目的で付加しているものであり、以後の計算には使わない．

4 付録 A 有限要素法の実行

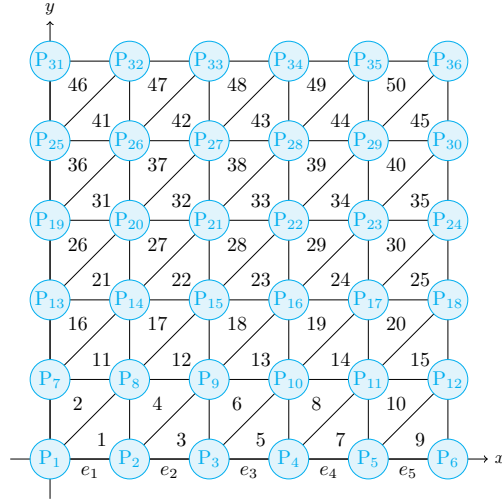
図 A.3 Ω の三角形分割

表 A.1 メッシュファイル (mesh.dat) の形式

(行番号)	mesh.dat				
1	np	nt	ne	nd	← パラメータ
2	x_1	y_1	idn ₁	0	← 節点座標
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	(idn _l = 0 内部節点)
np + 1	x_{np}	y_{np}	idn _{np}	0	(idn _l > 0 境界節点)
np + 2	#Q ₁ ¹	#Q ₂ ¹	#Q ₃ ¹	0	← 要素の節点番号
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	
np + nt + 1	#Q ₁ ^{nt}	#Q ₂ ^{nt}	#Q ₃ ^{nt}	0	
np + nt + 2	#R ₁ ¹	#R ₂ ¹	idr ₁	0	← Robin を課す辺の節点番号
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	(idr _k : 偶数)
np + nt + ne + 1	#R ₁ ^{ne}	#R ₂ ^{ne}	idr _{ne}	0	
np + nt + ne + 2	#D ₁ ¹	#D ₂ ¹	idd ₁	0	← Dirichlet を課す辺の節点番号
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	(idd _k : 奇数)
np + nt + ne + nd + 1	#D ₁ nd	#D ₂ nd	idd _{nd}	0	

A.2 メッシュデータの作成 5

リスト A.1 に示した `mk_square1.m` は、これを実行する MATLAB プログラムである。 L と m を与えると、 `square1.dat` に結果が保存される。これを用いて、 $L = 1$, $m = 5$ としたメッシュデータファイル `square1_5.dat` と、 $L = 1$, $m = 20$ のときの `square1_20.dat` を用意する (図 A.4 を見よ)。

```
function mk_square1(L, m)
h=L/m; mm=m+1; np=mm^2; ne=2*m^2; nr=m; nd=3*m;
x=linspace(0,L,mm); dat=[]; t=[]; p=[]; er=[]; ed=[];
% total numbers
dat=[dat;np,ne,nr,nd];
% nodes
for j=1:mm
    for i=1:mm
        k=(j-1)*mm + i; id=0; tmp=(i-1)*(j-1)*(i-mm)*(j-mm);
        if tmp==0 id=1; end
        p=[p;x(i),x(j),id,0];
    end
end
% elements
enum=0;
for j=1:m
    for i=1:m
        k=(j-1)*mm + i; kk=k+mm;
        t = [t;k, k+1, kk+1, 0]; t=[t;k, kk+1, kk, 0];
    end
end
% Robin boundaries
for i=1:m er=[er;i,i+1,2,0]; end
% Dirichlet boundaries
for j=1:m q=j*mm; ed=[ed;q,q+mm,1,0]; end
for i=1:m q=mm^2-i+1; ed=[ed;q,q-1,1,0]; end
for j=1:m q=mm^2-m-(j-1)*mm; ed=[ed;q,q-mm,1,0]; end
% output
dat=[dat;p;t;er;ed]'; F1 = fopen("square1.dat","w");
fprintf(F1,"%f %f %f %f\n",dat); fclose(F1);
end
```

リスト A.1 `mk_square1.m`

6 付録 A 有限要素法の実行

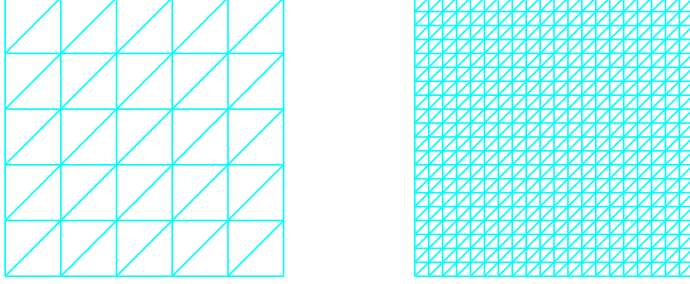


図 A.4 square1_5.dat と square1_20.dat

A.3 弱形式とその行列・ベクトル表現

関数空間

$$V = \{v \in H^1(\Omega) \mid v(x, y) = 0, (x, y) \in \Gamma_D\},$$

$$V(g) = \{v \in H^1(\Omega) \mid v(x, y) = g(x, y), (x, y) \in \Gamma_D\}$$

を導入すると, (A.1) の弱形式は, 次のようになる: $u \in V(g)$, かつ,

$$\begin{aligned} \nu \iint_{\Omega} \nabla u \cdot \nabla v \, dxdy + q \iint_{\Omega} uv \, dxdy + \kappa \int_{\Gamma_N} uv \, dS \\ = \iint_{\Omega} fv \, dxdy + \int_{\Gamma_N} (\kappa g + r)v \, dS \quad (\forall v \in V). \end{aligned} \quad (\text{A.3})$$

\mathcal{T}_h 上で, P1 有限要素空間 X_h を考える (??節で導入した X_h と同じ空間である). Π_h を \mathcal{T}_h に対応する Lagrange 補間作用素として, $f_h = \Pi_h f$, $g_h = \Pi_h g$, $r_h = \Pi_h r$ とする. V と $V(g)$ に対応した有限要素空間

$$V_h = \{v_h \in X_h \mid v_h(x, y) = 0, (x, y) \in \Gamma_D\},$$

$$V_h(g_h) = \{v_h \in X_h \mid v_h(x, y) = g_h(x, y), (x, y) \in \Gamma_D\}$$

を導入すると, (A.3) に対する有限要素近似は次のようになる: $u_h \in V(g_h)$, かつ,

$$\underbrace{\nu \iint_{\Omega} \nabla u_h \cdot \nabla v_h \, dxdy}_{=I_1} + q \underbrace{\iint_{\Omega} u_h v_h \, dxdy}_{=I_2} + \kappa \underbrace{\int_{\Gamma_N} u_h v_h \, dS}_{=I_3}$$

A.3 弱形式とその行列・ベクトル表現 7

$$= \underbrace{\iint_{\Omega} f_h v_h \, dxdy}_{=I_4} + \underbrace{\int_{\Gamma_N} (\kappa g_h + r_h) v_h \, dS}_{=I_5} \quad (\forall v_h \in V_h). \quad (\text{A.4})$$

??節で説明したように, (A.5) は連立一次方程式に帰着される. それを具体的に述べるために, 記号を設定しよう. $Z = \{1, 2, \dots, N\}$ とおく. 節点 P_i ($i \in \bar{\Lambda}$) に対応する X_h の P1 基底関数を ϕ_i とする. そして, 一般に, $u_h, v_h \in X_h$ を,

$$u_h = \sum_{j=1}^N u_j \phi_j, \quad v_h = \sum_{i=1}^N v_i \phi_i \quad (\text{A.5})$$

と表す. ただし, $u_j = u_h(P_j)$, $v_i = u_h(P_i)$ と書いている. さらに,

$$\mathbf{u} = \begin{pmatrix} u_1 \\ \vdots \\ u_N \end{pmatrix}, \quad \mathbf{v} = \begin{pmatrix} v_1 \\ \vdots \\ v_N \end{pmatrix} \quad (\text{A.6})$$

と書くと,

$$I_1 = \sum_{i=1}^N \sum_{j=1}^N v_i u_j \iint_{\Omega} \nabla \phi_j \cdot \nabla \phi_i \, dxdy = \mathbf{v} \cdot \mathbf{K} \mathbf{u}, \quad (\text{A.7a})$$

$$I_4 = \sum_{i=1}^N v_i \iint_{\Omega} f_h \phi_i \, dxdy = \mathbf{v} \cdot \boldsymbol{\beta} \quad (\text{A.7b})$$

と書ける. ただし, $\mathbf{K} = (K_{i,j})_{1 \leq i,j \leq N}$ と $\boldsymbol{\beta} = (\beta_i)_{1 \leq i \leq N}$ を

$$K_{i,j} = \iint_{\Omega} \nabla \phi_j \cdot \nabla \phi_i \, dxdy, \quad \beta_i = \iint_{\Omega} f_h \phi_i \, dxdy \quad (\text{A.8})$$

で定めている.

ここで, $\overline{\Gamma_D}$ 上に位置する節点番号の集合を Δ として, $\Lambda = Z \setminus \Delta$ とする. すなわち, $\Lambda = \{i \in Z \mid P_i \in \overline{\Omega} \setminus \overline{\Gamma_D}\}$, $\Delta = \{i \in Z \mid P_i \in \overline{\Gamma_D}\}$ である. 図 A.3 の三角形分割では $\Delta = \{1, 6, 7, 12, 13, 18, 19, 24, 25, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36\}$ となっている. ただし, 以下では, 説明の便宜上, $\Lambda = \{1, 2, \dots, n\}$,

8 付録 A 有限要素法の実行

$\Delta = \{n+1, \dots, N\}$ の形を仮定する（必要ならば、適当に番号を付け直せば良い）。その上で、

$$\mathbf{u} = \begin{pmatrix} \mathbf{u}_I \\ \mathbf{u}_\Delta \end{pmatrix}, \quad \mathbf{u}_I = \begin{pmatrix} u_1 \\ \vdots \\ u_n \end{pmatrix}, \quad \mathbf{u}_\Delta = \begin{pmatrix} u_{n+1} \\ \vdots \\ u_N \end{pmatrix}, \quad (\text{A.9a})$$

$$\mathbf{K} = \begin{pmatrix} \mathbf{K}_I & \mathbf{K}_{I2} \\ \mathbf{K}_{2I} & \mathbf{K}_\Delta \end{pmatrix}, \quad \mathbf{K}_I = (K_{i,j})_{1 \leq i,j \leq n}, \quad \mathbf{K}_{I2} = (K_{i,j})_{1 \leq i \leq n, n+1 \leq j \leq N} \quad \text{など} \quad (\text{A.9b})$$

と書くことにしよう。 \mathbf{v} や $\boldsymbol{\beta}$ についても、同様に、 $\mathbf{v} = \begin{pmatrix} \mathbf{v}_I \\ \mathbf{v}_\Delta \end{pmatrix}$ や $\boldsymbol{\beta} = \begin{pmatrix} \boldsymbol{\beta}_I \\ \boldsymbol{\beta}_\Delta \end{pmatrix}$ という表記を用いるが、 $v_h \in V_h$ のときは、 $\mathbf{v}_\Delta = \mathbf{0}$ となる。この表記を用いれば、 $v_h \in V_h$ に対して、 (A.7) は、

$$I_1 = \mathbf{v}_I \cdot \mathbf{K}_I \mathbf{u}_I + \mathbf{v}_I \cdot \mathbf{K}_{I2} \mathbf{u}_\Delta, \quad I_4 = \mathbf{v}_I \cdot \boldsymbol{\beta}_I \quad (\text{A.10})$$

となる。

他の項についても同様に計算すれば、結局、 (A.5) は、任意の $v_h \in V_h$ 、すなわち、任意の $\mathbf{v}_I \in \mathbb{R}^n$ に対して、

$$\begin{aligned} & \mathbf{v}_I \cdot \left[\underbrace{(\nu \mathbf{K}_I + q \mathbf{M}_I + \kappa \mathbf{R}_I)}_{=\mathbf{A}_I} \mathbf{u}_I + \underbrace{(\nu \mathbf{K}_{I2} + q \mathbf{M}_{I2} + \kappa \mathbf{R}_{I2})}_{=\mathbf{A}_{I2}} \mathbf{u}_\Delta \right] \\ & = \mathbf{v}_I \cdot (\boldsymbol{\beta}_I + \boldsymbol{\rho}_I) \quad (\text{A.11}) \end{aligned}$$

が成り立つことと同値である。ここで、 $\mathbf{M}_I = (K_{i,j})_{1 \leq i,j \leq n}$ 、 $\mathbf{R}_{I2} = (R_{i,j})_{1 \leq i \leq n, n+1 \leq j \leq N}$ や $\boldsymbol{\rho}_I = (\rho_i)_{1 \leq i \leq n}$ 、などは、

$$M_{i,j} = \iint_{\Omega} \phi_j \phi_i \, dx dy, \quad R_{i,j} = \int_{\Gamma_N} \phi_j \phi_i \, dS, \quad \rho_i = \int_{\Gamma_N} (\kappa g_h + r_h) \phi_i \, dS \quad (\text{A.12})$$

を用いて、 \mathbf{M}_I 、 \mathbf{M}_{I2} や $\boldsymbol{\beta}_I$ に準じて定められる。

そして、 \mathbf{u}_Δ は、境界条件 $u_h \in V_h(g_h)$ を用いて、

$$\mathbf{u}_\Delta = \mathbf{g}_\Delta = \begin{pmatrix} g_h(P_{n+1}) \\ \vdots \\ g_h(P_N) \end{pmatrix} \quad (\text{A.13})$$

とすれば良い。

まとめると、(A.1) に対する有限要素近似 (A.3) は、行列・ベクトル形式では、

$$\mathbf{v}_I \cdot (\mathbf{A}_I \mathbf{u}_I + \mathbf{A}_{I2} \mathbf{g}_\Delta) = \mathbf{v}_I \cdot (\boldsymbol{\beta}_I + \boldsymbol{\rho}_I) \quad (\forall \mathbf{v}_I \in \mathbb{R}^n)$$

となる。 \mathbf{v}_I は任意なのだから、これは、次と同値である：

$$\mathbf{A}_I \mathbf{u}_I = \boldsymbol{\beta}_I + \boldsymbol{\rho}_I - \mathbf{A}_{I2} \mathbf{g}_\Delta \quad (\text{A.14})$$

求めるべき未知ベクトルは、もちろん、 $\mathbf{u}_I \in \mathbb{R}^n$ である。

A.4 メイン関数

A.2 節で説明したメッシュデータファイル `square1_20.m` などを用意しておく。また、例 A.1 で用意した f , g , r の関数形を記述した `fem_func1.m` を用意しておく（リスト A.2）。

```
function z=fem_func1(id, x, y)
a=0.5; b=0.5; lam=5; r=(x-a).^2+(y-b).^2; w=exp(-5*r);
switch id
    case 0 % right-hand side function
        z = w .* (1+4*lam-4*lam^2.*r);
        %z=ones(size(x));
    case 1 % Dirichlet g
        z = w;
    case 2 % Neumann r
        z = 2*lam*(y-b) .* w;
    case 3 % exact solution u
        z = w;
    case 4 % exact solution u_x
        z = -2*lam*(x-a) .* w;
    case 5 % exact solution u_y
        z = -2*lam*(y-b) .* w;
end
```

10 付録 A 有限要素法の実行

end

リスト A.2 fem_func1.m

(A.1) を有限要素法で解く際に、実行するのは、リスト A.3 に示した MATLAB プログラム p1fem1.m である（このようなプログラムをメイン関数という）。

```
function p1fem1(datafile,givenfunc)
% read mesh data
[deg,p,idp,t,idt,e,ide,d,idd] = getmesh(datafile);
% coefficients
%coef_c = 1.0; coef_q = 1.0; coef_kappa = 1.0;
coef_c = 1.0; coef_q = 0.0; coef_kappa = 0.0;
% stiffness/mass matrices and force term
[K, M, b] = matrix1(p,t,givenfunc);
% Robin BC
[R, rho] = boundary1(p,e,coef_kappa,givenfunc);
% global coefficient matrix
Aglobal = coef_c*K + coef_q*M + coef_kappa*R;
% global right-hand side vector
bglobal = b + rho;
% Dirichlet BC and solving Au=b
[A,b,usol] = dirichlet1(p,d,Aglobal,bglobal,givenfunc);
% 3D plot
figure(5); plot_p1fem(p,t,usol); saveas(5,"p1fem1.pdf");
% output results
F1=fopen("p1fem1.res","w"); Z=[p;usol'];
fprintf(F1,"%f %f %f\n",Z); fclose(F1);
end
```

リスト A.3 p1fem1.m

getmesh.m（リスト A.4 を見よ）で、square1_20.dat などから、次のデータを読み取る。

$$p = \begin{pmatrix} x_1, \dots, x_{np} \\ y_1, \dots, y_{np} \end{pmatrix}, \quad t = \begin{pmatrix} \#Q_1^1, \dots, \#Q_1^{nt} \\ \#Q_2^1, \dots, \#Q_2^{nt} \\ \#Q_3^1, \dots, \#Q_3^{nt} \end{pmatrix},$$

$$e = \begin{pmatrix} \#R_1^1, \dots, \#R_1^{ne} \\ \#R_2^1, \dots, \#R_2^{ne} \end{pmatrix}, \quad d = \begin{pmatrix} \#D_1^1, \dots, \#D_1^{nd} \\ \#D_2^1, \dots, \#D_2^{nd} \end{pmatrix}.$$

idn_l なども配列に入れるが、結局使わない。

`p1fem1.m` の他の部分については、以下の節で順に説明する。

```
function [deg,p,idp,t,idt,e,ide,d,idd] = getmesh(filename)
FILE1 = fopen(filename,'r'); formatSpec = '%f %f %f %f';
sizeD = [4 Inf]; D = fscanf(FILE1,formatSpec,sizeD); fclose(FILE1);
D=D'; np=D(1,1); nt=D(1,2); ne=D(1,3); nd=D(1,4);
deg=[np nt ne nd]; p=D(2:np+1,1:2)'; idp=D(2:np+1,3)';
t=D(np+2:np+nt+1,1:3)'; idt=D(np+2:np+nt+1,4)';
e=D(np+nt+2:np+nt+ne+1,1:2)'; ide=D(np+nt+2:np+nt+ne+1,3)';
d=D(np+nt+ne+2:np+nt+ne+nd+1,1:2)';
idd=D(np+nt+ne+2:np+nt+ne+nd+1,3)';
end
```

リスト A.4 `getmesh.m`

A.5 係数行列の構成

\mathbf{K} , \mathbf{M} , \mathbf{R} , β と ρ を具体的に計算しよう。

まず、 \mathbf{K} の各成分 $K_{i,j}$ の構成について説明する。 $i, j \in Z$ に対して、 $K_{i,j}$ は (A.8) で定められているのだった。もし、 P_i と P_j が辺を共有していない（すなわち、同一の要素上の節点でない）ときには、 $K_{i,j} = 0$ である。 P_i と P_j が辺を共有している場合を考える。さらに、 P_i と P_j のうち少なくとも一つが Ω の内部に位置するとしよう。このとき、これらを両端点に辺は2つの要素 T_e と $T_{e'}$ の共通部分になっており、さらに、

$$K_{i,j} = \underbrace{\iint_{T_e} \nabla \phi_i \nabla \phi_j \, dxdy}_{=K_{i,j}^e} + \underbrace{\iint_{T_{e'}} \nabla \phi_i \nabla \phi_j \, dxdy}_{=K_{i,j}^{e'}} \quad (\text{A.15})$$

と計算できる。したがって、 i と j を Z の中で動かして、 T_e や $T_{e'}$ の重心座標を用いて、 $K_{i,j}$ を計算することができる。

しかし、プログラミングの立場からは、このような“節点志向”でなく、以下で説明する“要素志向”で \mathbf{K} の各成分を構成する方が考えやすい。そのために、(A.7a) を次のように書いてみる：

12 付録 A 有限要素法の実行

$$I_1 = \sum_{l=1}^{\text{nt}} \underbrace{\iint_{T_l} \nabla u_h \cdot \nabla v_h \, dxdy}_{=J_l}. \quad (\text{A.16})$$

しばらくの間, T_l を固定して, J_l を計算しよう. T_e の3頂点を P_i, P_j, P_k とする. ただし, $P_i \rightarrow P_j \rightarrow P_k$ が反時計回りの向きになると仮定して, $Q_1 = P_i, Q_2 = P_j, Q_3 = P_k$ とする. その上で, T_e に対応する重心座標を $\{\lambda_\nu = \lambda_{l,\nu} = \lambda_{T_l,\nu}\}_{\nu=1}^3$ とする. \hat{u} と \hat{v} と, それぞれ, u_h と v_h の T_e 上への制限として,

$$\hat{u} = \sum_{\mu=1}^3 \hat{u}_\mu \lambda_\mu, \quad \hat{v} = \sum_{\nu=1}^3 \hat{v}_\nu \lambda_\nu$$

と書こう. ここで, $\hat{u}_1 = \hat{u}(Q_1) = u_h(P_i)$ などおいている.

そうすると, J_e は,

$$J_l = \sum_{\nu=1}^3 \sum_{\mu=1}^3 \hat{v}_\nu \hat{u}_\mu \underbrace{\iint_{T_l} \nabla \lambda_\mu \cdot \nabla \lambda_\nu \, dxdy}_{=\hat{K}_{\nu,\mu}} \quad (\text{A.17})$$

となる. 各重心座標を $\lambda_\nu = a_\nu + b_\nu x + c_\nu y$ と書いておく. ??節の??を用いれば, $\hat{\mathbf{K}}^l = (\hat{K}_{\nu,\mu})_{1 \leq \nu, \mu \leq 3}$ は,

$$\hat{\mathbf{K}}^l = \frac{1}{4|T_l|} \left[\begin{pmatrix} b_2 - b_3 \\ b_3 - b_1 \\ b_1 - b_2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} b_2 - b_3 \\ b_3 - b_1 \\ b_1 - b_2 \end{pmatrix}^T + \begin{pmatrix} a_3 - a_2 \\ a_1 - a_3 \\ a_2 - a_1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} a_3 - a_2 \\ a_1 - a_3 \\ a_2 - a_1 \end{pmatrix}^T \right] \quad (\text{A.18})$$

と計算できる.

ここで, (A.7a), (A.15), (A.16) と (A.17) を比べてみよう. $\hat{u}_1 = u_i, \hat{u}_2 = u_j, \hat{v}_1 = v_i, \hat{v}_2 = v_j$ であるから, $K_{i,j}^e = \hat{K}_{i,j}$ であることがわかる. $K_{i,j}$ の値を求めるには, $K_{i,j}^{e'}$ の値も必要であるが, これは, $T_{e'}$ に対する $J_{e'}$ を計算する際に算出される.

- $\mathbf{K} = \mathbf{O}$ としておく.

- $e = 1, 2, \dots, E$ に対して, $\hat{\mathbf{K}}^e$ の各成分を計算して, $\mathbf{K} = (K_{i,j})_{1 \leq i,j \leq N}$ の各成分の値を次のように更新する:

$$\begin{aligned} K_{i,i} &\leftarrow K_{i,i} + \hat{K}_{1,1} & K_{i,j} &\leftarrow K_{i,j} + \hat{K}_{1,2} & K_{i,k} &\leftarrow K_{i,k} + \hat{K}_{1,3} \\ K_{j,i} &\leftarrow K_{j,i} + \hat{K}_{2,1} & K_{j,j} &\leftarrow K_{j,j} + \hat{K}_{2,2} & K_{j,k} &\leftarrow K_{j,k} + \hat{K}_{2,3} \\ K_{k,i} &\leftarrow K_{k,i} + \hat{K}_{3,1} & K_{k,j} &\leftarrow K_{k,j} + \hat{K}_{3,2} & K_{k,k} &\leftarrow K_{k,k} + \hat{K}_{3,3}. \end{aligned}$$

\mathbf{M} の導出も同様に考えれば良い. (A.5) で定めた I_2 を,

$$I_2 = \sum_{l=1}^E \sum_{\nu=1}^2 \sum_{\mu=1}^3 \hat{v}_\nu \hat{u}_\mu \underbrace{\iint_{T_l} \lambda_\mu \lambda_\nu \, dxdy}_{=\hat{M}_{\nu,\mu}}$$

と書いておくと, (??) により, $\hat{\mathbf{M}}^l = (\hat{M}_{\nu,\mu})_{1 \leq \nu,\mu \leq 3}$ は,

$$\hat{\mathbf{M}}^l = \frac{|T_l|}{12} \begin{pmatrix} 2 & 1 & 1 \\ 1 & 2 & 1 \\ 1 & 1 & 2 \end{pmatrix}$$

と計算できる. \mathbf{K} のときと同様に, $\hat{M}_{\nu,\mu}$ を対応する $M_{i,j}$ に加えていけば良い.

リスト A.5 に示した `matrix1.m` において, \mathbf{K} と \mathbf{M} を計算する. `matrix1.m` では, 各 $l = 1, 2, \dots, nt$ に対して, `tlocal = (#Q1l, #Q2l, #Q3l)T`, `x = p(1,tlocal) = (xs, xt, xv)`, `y = p(2,tlocal) = (ys, yt, yv)` とする. ただし, `#Q1l = s`, `#Q2l = t`, `#Q3l = v` としている. そして, リスト A.6 の `P1grad.m` で (A.18) の計算で使う b_ν や c_ν を計算し, $\hat{\mathbf{K}}^l$, $\hat{\mathbf{M}}^l$ の各成分を計算する. それらを用いて, 対応する \mathbf{K} , \mathbf{M} の成分を計算している.

```
function [K, M, force] = matrix1(p,t,givenfunc)
np = size(p,2); nt = size(t,2);
K = sparse(np,np); M = sparse(np,np); force = zeros(np,1);
for l = 1:nt
    tlocal=t(1:3,l); x=p(1,tlocal); y=p(2,tlocal); [area,b,c]=P1grad(x,y);
    % stiffness matrix
```

14 付録 A 有限要素法の実行

```

Klocal=(b*b'+c*c')*area; K(tlocal,tlocal)=K(tlocal,tlocal)+ Klocal;
% mass matrix
Mlocal = [2 1 1; 1 2 1; 1 1 2]/12*area;
M(tlocal,tlocal)=M(tlocal,tlocal)+Mlocal;
%force term
flocal=Mlocal*givenfunc(0,x,y)'; force(tlocal)=force(tlocal)+flocal;
end
end

```

リスト A.5 matrix1.m

```

function [area,b,c] = P1grad(x,y)
area=polyarea(x,y);
b=[y(2)-y(3); y(3)-y(1); y(1)-y(2)]/2/area;
c=[x(3)-x(2); x(1)-x(3); x(2)-x(1)]/2/area;
end

```

リスト A.6 P1grad.m

A.6 右辺ベクトルの構成と Robin 境界条件の取り込み

(A.7b) の I_4 を計算して, β を求めよう. いままでの表記を用いると, T_l 上では, $f_h = \sum_{\nu=1}^3 \hat{f}_\nu \lambda_\nu$, $v_h = \sum_{\nu=1}^3 \hat{v}_\nu \lambda_\nu$ と書けているのだから,

$$I_4 = \sum_{l=1}^{nt} \iint_{T_l} f_h v_h \, dx dy = \sum_{l=1}^{nt} \sum_{\nu=1}^3 \sum_{\mu=1}^3 \hat{v}_\nu \hat{f}_\mu \hat{M}_{\nu,\mu}^l$$

となる. ここで, $\hat{f}_1 = f(Q_1) = f(P_i)$ などを意味する ($f_h(Q_1) = f(Q_1)$ などに注意せよ). したがって,

$$\hat{\beta}^l = \hat{M}^l \begin{pmatrix} f(Q_1) \\ f(Q_2) \\ f(Q_3) \end{pmatrix}$$

を計算して, 対応する β の成分に加えていけば良い. これを行うのが `force1.m` である. リスト A.7 を見よ. この中で, $f(x, y)$ の値は, `givenfunc(0, x, y)` で参照される.

A.6 右辺ベクトルの構成と Robin 境界条件の取り込み 15

```

function [force] = force1(p,t,givenfunc)
np = size(p,2); nt = size(t,2); force = zeros(np,1);
for l = 1:nt
    tlocal=t(1:3,l); x=p(1,tlocal); y=p(2,tlocal); [area,b,c]=P1grad(x,y);
    Mlocal = [2 1 1; 1 2 1; 1 1 2]/12*area;
    %force term
    %flocal=givenfunc(0,x,y)'/3*area;
    flocal=Mlocal*givenfunc(0,x,y)'; force(tlocal)=force(tlocal)+flocal;
end
end

```

リスト A.7 force1.m

次に, Robin 境界条件 (A.1b) からの寄与となる

$$I_3 = \sum_{k=1}^{ne} \int_{e_k} u_h v_h \, dS, \quad I_5 = \sum_{k=1}^{ne} \int_{e_k} \underbrace{(\kappa g_h + r_h)}_{=z_h} v_h \, dS$$

について考える (e_k はすべて線分である). しばらく k は固定して, e_k の両端の節点を P_i, P_j , 長さを l_k する. e_k は境界上に位置しているので, これを一辺として含む要素 T_l は唯一である. e_k を $(x, y)^T = (1 - \xi)\overrightarrow{OP_i} + \xi\overrightarrow{OP_j}$ ($0 \leq \xi \leq l$) とパラメータ ξ で表示すると,

$$\int_{e_k} u_h v_h \, dS = \int_0^l \hat{u}(\xi) \hat{v}(\xi) \, d\xi$$

と書ける (こうなるように P_i と P_j に向きついている). ここで, 例えば, \hat{u} は, $[0, l]$ 上の一次関数で $\hat{u}(0) = u_h(P_i)$, $\hat{u}(l) = u_h(P_j)$ となるものである. この積分は, “ e_k 上の重心座標”

$$\eta_1(\xi) = \frac{l - \xi}{l}, \quad \eta_2(\xi) = \frac{\xi}{l}$$

を導入することにより,

$$I_3 = \sum_{k=1}^{ne} \sum_{\nu=1}^2 \sum_{\mu=1}^2 \hat{v}_\nu \hat{u}_\mu \underbrace{\int_0^l \eta_j \eta_i \, d\xi}_{=\hat{R}_{\nu,\mu}}, \quad I_5 = \sum_{k=1}^{ne} \sum_{\nu=1}^2 \sum_{\mu=1}^2 \hat{v}_\nu \hat{z}_\mu \hat{R}_{\nu,\mu}$$

16 付録 A 有限要素法の実行

となり, さらに, $\hat{\mathbf{R}}^k = (\hat{R}_{\nu,\mu})_{1 \leq \nu, \mu \leq 2}$ と $\hat{\boldsymbol{\rho}}^k = (\hat{\rho}_\nu)_{1 \leq \nu \leq 2}$ は,

$$\hat{\mathbf{R}}^k = \frac{|e_k|}{6} \begin{pmatrix} 2 & 1 \\ 1 & 2 \end{pmatrix}, \quad \hat{\boldsymbol{\rho}}^k = \hat{\mathbf{R}}^k \begin{pmatrix} z(R_1) \\ z(R_2) \end{pmatrix}$$

と計算できる. これらを, それぞれ, 対応する \mathbf{R} と $\boldsymbol{\beta}$ の成分に加えていけば良いのは今までと同じである. リスト A.8 の `force1.m` でこれを行う. この中で, $g(x, y)$ の値は `givenfunc(1,x,y)` で, $r(x, y)$ の値は `givenfunc(2,x,y)` で参照される.

```
function [R,rho] = boundary1(p,e,coef_kappa,givenfunc)
np = size(p,2); ne = size(e,2);
R = sparse(np,np); rho = zeros(np,1);
for k = 1:ne
    elocal = e(1:2,k); x = p(1,elocal); y = p(2,elocal);
    length = sqrt((x(1)-x(2))^2+(y(1)-y(2))^2);
    % for mass matrix
    Rlocal=[2 1; 1 2]*length/6; R(elocal,elocal)=R(elocal,elocal)+Rlocal;
    % for right-hand side vector
    % xc = mean(x); yc = mean(y); rlocal = tmp*[1; 1]*length/2;
    tmp = coef_kappa*givenfunc(1,x,y)+givenfunc(2,x,y);
    rlocal = Rlocal*tmp'; rho(elocal) = rho(elocal) + rlocal;
end
```

リスト A.8 boundary1.m

A.7 Dirichlet 境界条件の取り込みと連立一次方程式の解法

ここまでの計算で, 係数行列 $c\mathbf{K} + q\mathbf{M} + \kappa\mathbf{R}$ と右辺ベクトル $\boldsymbol{\beta} + \boldsymbol{\rho}$ が得られている. Dirichlet 境界条件 (A.1c) を取り込むために, $1, 2, \dots, np$ を, Dirichlet 境界条件を課す節点番号の集合 Δ とそれ以外の集合 Λ に分けて, (A.11) のように A_1 などを作る. $\mathbf{u}_\Delta = \mathbf{g}_\Delta$ は, Dirichlet 境界条件から直接に計算できる. あとは, 連立一方程式 (A.14) を解いて \mathbf{u}_1 を求めれば, 最終的な答えである \mathbf{u} が得られるのである.

これを行うのがリスト A.9 の `dirichlet1.m` である. `fixed` が Δ , `free` が Λ を表している. 図 A.7 のような形式で, 結果が `pifem1.res` というファイル

表 A.2 結果ファイル (p1fem1.res) の形式

x_1	y_1	$u_h(P_1)$
x_2	y_2	$u_h(P_2)$
\vdots	\vdots	\vdots
x_{np}	y_{np}	$u_h(P_{np})$

に書き込まれる.

```
function [A,b,u] = dirichlet1(p,d,A,b,givenfunc)
np = size(p,2); u = zeros(np,1);
% boundary and interior nodes
fixed=unique(d); free=setdiff([1:np],fixed);
% set boundary value
g=zeros(np,1); x=p(1,fixed); y=p(2,fixed); g(fixed)=givenfunc(1,x,y);
% re-allocate A and b
b = b(free)-A(free,fixed)*g(fixed); A = A(free,free);
% solving Au = b
u(fixed) = g(fixed); u(free) = A\b;
end
```

リスト A.9 dirichlet1.m

A.8 解の可視化

得られた解を plot_p1fem.m で可視化する. 結果は図 A.5 の通りである.

```
function plot_p1fem(p,t,u)
nt=size(t,2); X=zeros(3*nt,1); Y=zeros(3*nt,1); uu=zeros(3*nt,1);
%
i=t(1,:); j=t(2,:); k=t(3,:);
X(1:3:end)=p(1,i); X(2:3:end)=p(1,j); X(3:3:end)=p(1,k);
Y(1:3:end)=p(2,i); Y(2:3:end)=p(2,j); Y(3:3:end)=p(2,k);
uu(1:3:end)=u(i); uu(2:3:end)=u(j); uu(3:3:end)=u(k);
% using only cyan
%trisurf(reshape([1:3*nt],3,nt)',X,Y,uu,'FaceColor',[0.95 1 1],'EdgeColor',[0 1 1]);
% full color
trisurf(reshape([1:3*nt],3,nt)',X,Y,uu);
%colormap gray; view(49,47);
```

18 付録 A 有限要素法の実行

```
% axes settings
xlabel('x','FontSize',14); ylabel('y','FontSize',14);
%axis vis3d equal; grid on;
end
```

リスト A.10 plot_p1fem.m

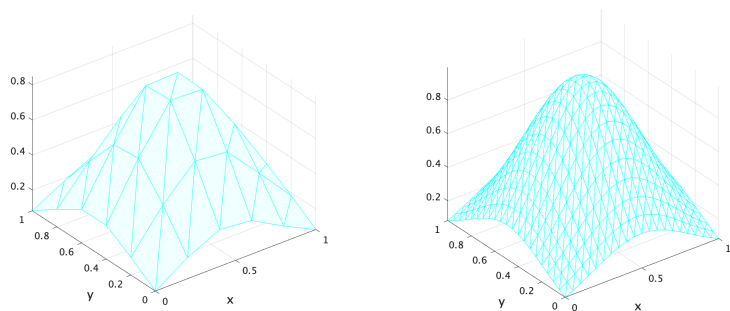


図 A.5 square1_5.dat と square2_20.dat を使って、例 A.1 のデータに対して、p1fem1.m で (A.5) を解いた結果.

参考文献

- [1] 川原睦人, 有限要素法流体解析, 日科技連, 1985 年.
- [2] 菊地文雄, 有限要素法概説 [新訂版], サイエンス社, 1999 年.
- [3] 森正武, FORTRAN77 数値計算プログラミング, 岩波書店, 1987 年.
- [4] 日本計算工学会・編集, 有限要素法による流れのシミュレーション [第 3 版]—OpenMP に基づく Fortran ソースコード付, 丸善出版, 2017 年.
- [5] M. G. Larson and F. Bengzon, *The Finite Element Method: Theory, Implementation, and Applications*, Springer, 2013.